

小説『ジョナサン・ワイルド大王』の本質 (The Essence of the Novel *Jonathan Wild the Great*)

児 玉 啓 介
(Keisuke KODAMA)

1. 小説とその構成

『ジョナサン・ワイルド大王』という小説はヘンリー・フィールディング (1707～54) によって1743年に書かれたもので、1725年に処刑された実在の大泥棒を実名のまま主人公としているが、当時の総理大臣サー・ロバート・ウォールポール (在任期間1721～42) への諷刺と皮肉が作全体の大きな眼目となっている。

小説の題名は次の通りである。

The History of the Life of the late Mr. Jonathan Wild

『故ジョナサン・ワイルド氏の生涯の物語』

『ジョウゼフ・アンドルーズ』の場合と同じように、小説 (novel) ではなくて、物語 (history) であり、小説家 (novelist) ではなくて、伝記作者 (biographer) である。小説は全部で4巻56章から成っているが、1巻は14章、2巻は13章、3巻は14章、4巻は15章から成っている。

この小説では偉大さ (greatness)、偉人 (great man)、信義 (honour) がキーワードであるが、この各語に関連のある章は1巻で12章、2巻で5章、3巻で5章、4巻で5章であり、全体的に見ると、大体半分ぐらいが関連があることになる。

2. 作家の意図

次は1巻1章の要約である。

「驚くべき大事件はすべて、その計画が人間の発明と技術の最大の力によって立てられ、行なわれ、完成されるので、卓越した偉人たちによって作り出されることが必要であるが、そのような人の伝記は正当に正確に歴史の精髓と呼ばれるだろう。これらの伝記を思慮深い作家が伝えると、私たちは最も快適に楽しまされるだけでなく、最も有益に教育される。というのは、一般的人間性、即ち、人間性の秘密の根源、いろいろ不正な行動、複雑な迷路の完全な知識を得るほかに、眼の前に好ましいことやいまいましいこと、賞賛または嫌悪に価することを見るし、熱心に模倣すべきこと、あるいは注意深く避けるべきこと、教訓によるよりも、無限にもっと効果的方法で、結果的に私たちは教えられるからである。

同じ登場人物の中に、善と悪の非常に入りまじったものを私たちはしばしば見つけるので、

はかりがどっちに傾くか決定することは非常に正確な判断と非常に入念な追究を必要とするし、私たちはブルータスのような人、ネロのような人に時々出会っても、大多数の人が全く善でもないし悪でもない入りまじった性質をもっているし、彼らの最大の美德は悪徳によって曖昧にされやわらげられるし、悪徳はまた美德によってやわらげられ色づけされるものである。

この性質を私たちが今取りかかる物語の有名な人物は持っていたし、彼に対して自然の女神は最もすばらしい、最も輝やかなしい才能を与えたけれども、その才能を全く純粹にそして不純物なしに与えたのではなかった。彼は性格の中に賞賛すべきものを沢山持っていたし大抵主人公にあるようなものを恐らく沢山持っていたけれども、彼が全くすべての欠点からまぬかれているというのではない。

従って、私たちは人間性の優秀性の完璧の、最高の典型を読者に与えるのではなく、むしろ、私たちがここに記録するあの偉大な性質の光沢に陰をさすいくつかの小さな不完全なものを忠実に記録することによって、人間性のもろさを読者に嘆かせ、どんな人間も十分吟味すると、私たちの賞賛の適当な対象にはなりえないということを読者に確信させているのである。

しかし私たちはこの大作にはいる前に、人類が作家たちの不誠実によって身につけて来た意見のいくつかの誤りを取り除く努力をしなければならない。というのは、作家たちは「聖人」とか「哲学者」といわれる素朴な連中の時代遅れの不合理な教義を否定することを恐れて、偉大さ (greatness) と善良さ (goodness) の考えを混同する努力をできるだけ沢山してきたからであり、偉大さはあらゆる種類の害悪を人間にもたらすことにあり、善良さは害悪を人間から取り除くことにあるからである。

アレキサンダーとシーザーの物語において、私たちは彼らの善意と寛大さ、寛容と親切をしばしば、全く見当違いに思い出す。前者が戦火と刀剣によって大帝国を侵略し、莫大な人数のあわれな人々の生命を奪い、つむじ風のように破滅と荒廃をまきちらしたとき、彼の寛容の実例として、彼は老女ののどを切ったりその娘に暴行をしたりしたのではなく、ただ彼女たちを墮落させることで満足したと私たちは教えられている。一方、強力なシーザーが、すばらしい心の偉大さで、彼の国の自由を破壊し、詐欺と権力のあらゆる手段によって、彼自身を同輩たちの先頭におき、太陽が今まで見たこともない最も偉大な人々を墮落させ奴隷にしたとき、彼の従者と手先の手段によって彼は目的を達成したし、彼らの援助によって目的を確立するはずだったが、彼の寛大の証拠として、彼らに与えた気前のよい施しを私たちは思い出す。

ところで、このような卑劣な性質がこれらの偉人の中の装飾物として賞賛されるよりもむしろ不完全なものとして嘆かれるべきであることを、むしろ彼らの栄光をおおい隠して偉大さの競争の中に彼らを引きとめることを、彼らがこの世に生まれて来た目的に本当に値しないことを、即ち、広大で強力な害悪を犯したことを、誰も理解しないのか。

私たちは一人の偉人の行動を記録するのであって、善良さを下品なもの不完全なものとして述べている。私たちの主人公はその下品さをあまりもっていないが、悪魔主義の完全さの代りに人間性の不完全さを十分もっているのです、彼をあえて大王 (The Great) と私たちは呼ぶこ

とにしたのであり、読者はこの称号に同意することを私たちは疑わない。」

3. 語または文の例証

(1)偉大さ (greatness) について

小説『ジョナサン・ワイルド大王』の中で最も重要な語は「偉大さ」「偉さ」(greatness)である。この語を手始めに、「偉大さ」の意味とその語を中心とする文や、その他の語や文を例証しながら、私の感想を簡潔に述べて行くことにする。

(a)ワイルドが仲間とゲームをしたあと、自分の夜の穴蔵に退き、バグショット君と紳士からすり取ったものを考えながら、次のように一人で推論を始める。

「政治の術は掛け算の術であり、偉大さの程度はふたつの小さな言葉、より多い (more) より少ない (less, fewer) によって構成されている。人類はまずふたつの大きな区分、即ち、自分自身の手を使う人と他人の手を使う人、で正当に考えられるべきである。前者は下品で下層階級の人、後者は上流気取りの人である。前者は自作農、製造業者、商人、そして紳士であり、後者は征服者、絶対君主、政治家、そして泥棒である。アレキサンダー大王はタタール族やアラビア族の首領より偉いにすぎない。それでは一人の泥棒は自分の手だけを使うからといってどんな偉人よりもどの点で劣っているのか。というのはそのために彼は下品で野卑な連中と同一視すべきではないし、彼は自分の使用のためだけに自分の手を使うからである。ところで、泥棒がどんな総理大臣にも劣らぬくらい沢山の道具 (一味) を持っているとしたら、どんな総理大臣にも劣らぬくらい偉くないのだろうか。疑いもなく偉いのである。」(1巻14章)

ワイルドは泥棒 (ここでは、すり) であるが、下品で下層階級の連中と同列におかずに、征服者、具体的には、アレキサンダー大王などと同列において、大見えを切っているのである。例文中の総理大臣は、具体的には、当時の総理大臣サー・ロバート・ウォールポールのことを言っている。

(b)ワイルドが友人のハートフリーとカウントから金をすり取ろうと考えている場面で。

「ワイルドはハートフリー (彼はワイルドを今まで全然疑っていない) をだますのをもっと確実にすることを申し出ただけでなく、カウント自身から大金を奪うことを申し出たように思われる。他人をだますための私たちの道具であるまさにその手先をだますこの二重の方法こそ偉大さの最上級であり、粘土でできたどんな人間ももっていないくらい悪魔主義そのものにほとんど不足していない。」(2巻2章)

友人二人から金を奪う (rob) といっても、文字通り「強奪する」のではなくて、相手からすり取るのであり、悪魔主義 (diabolism) といっても、純粹のワルではなくて、相手の油断のすきをねらうわけだから、ゲーム (遊び) をしているようなものであり、そのゲームではワイルドの方が上手^{じょうず}というだけである。

(c)上記と同じ場面で。

「偉大さの最も真実の特徴は飽くことを知らないことである。ワイルドは戦利品の四分の三

を受け取ることをカウントと約束し、同時に、相手の四分の一を確保することを自分自身と約束し、そのために彼は非常に大きなすばらしい計画を立てたが、今は絶対に無くしてしまう危険にあるハートフリーによって受けとられるべき金額に関心をもって見ていた。」(2巻2章)

幼児期の子供でとことん自分のものにしようとする時期があるが、ワイルドはその頃の精神状態から少しも成長していないのである。

(d)ワイルドのゲーム相手のカウントはさがしても見つからないし、紳士はドーヴァーに旅行に出ていないとわかり、仕方なく自分の穴蔵に帰ってからワイルドが言う独白。

「人間の偉大さは何とむなしいことか。すぐれた能力は何に役立つのか。一番よい計画がだめになりそうな時、下品な連中を制限する狭い規則と限界の無視は何に役立つのか。泥棒の状態は何と不幸なことか。あらゆる計略に対して予見したり身を守ったりすることが、人間の用心深さにとって何と不可能なことか。他人のためにおれの一人の友人を駄目にするよりも、友情と道德の簡単な掟を守ることはおれにとってよかった。おれは彼の財布を適度に支配して来たのかも知れない。もう彼はおれに仕える力をなくしている。といってもそれがおれの意図ではなかった。おれが自分の行為をとがめることができないなら、なぜ女・子供のように、ただチャンスをのがしてなぜ嘆くべきか。人はおれをだしぬくように間違った振舞いをしなかったか。でもそれは避けることはできない。この点で泥棒は誰よりも不幸である。注意深い人は群衆の中でポケットに両手をつっこんでポケットを守るかも知れないが、泥棒が人のポケットに手を入れる間、どのようにして自分のを守ることができるか。実際この点で泥棒よりあわれなものを何が想像できるか。取得物は何と危険なことか。所有物は何と不安でおちつかないことか。それではなぜ人は泥棒になりたがるのか。あるいは泥棒の偉大さはどこにあるのか。おれは答える。それは心の中にあると。それは心の中の栄光であり、偉大な驚くべき行為をする秘密の意識であり、それだけが本当に偉大な人を支持することができる。彼が征服者であっても、暴君であっても、政治家であっても、泥棒であっても。これが私的ののろい、公的ののろいに対して彼を支えているにちがいないし、彼が全人類によって嫌われ憎まれている間、彼を心の中で満足させているにちがいない。というのはこのような何か内的満足以外に何が、権力を持ち、財産を持ち、誇り・貪欲・ぜんたくが願う人間のあらゆる祝福をもつ人を鼓舞して、自分の家を捨てさせ、安楽と平静を捨てさせることができるだろうか。財宝と快楽を犠牲にし、労力と困難を犠牲にし、幸運が気前よく与えるすべてのものを犠牲にして、隣人を苦しめるために、強姦・強奪・流血そして同族の中にあらゆる悲惨を招き入れるために、軍隊という泥棒の大群の先頭に彼らを送ることができるのか。栄光ある心の欲望以外に何が、最大の名誉を授けられ、最大の収入で豊かになっている王子を刺激して、正にその王子のぜいたくのために汗を流し、王子の誇りにひざまづくことに満足している部下たちから彼らの自由を無理に奪いたい気持ちにさせるのか。最後に、どんなに少ない誘惑で泥棒を説得して、安全で、正直で、豊かな生計を得る方法を捨てさせるのか。平坦な生活を犠牲にしてまで、そして不確実で、不確かで、安心できない獲物のために、これは間違って不名誉と呼ばれるが、自国の法律を公然と勇

敢に破らせるのか。おれは成功しなかったが、賢明であったことをふりかえると自分自身満足したい気がするし、不幸であっても偉大な人物である。」（2巻4章）

当時の為政者や上流階級の人や歴史的事実を誤解している人々（価値観を変えれば、偉くも何ともない人を偉いと信じている人々）に対するワイルドの、そして作者の風刺であり、皮肉である。

(e)ワイルドがボートに1人乗せられて、海をさまよっている場面での描写。

「真実の偉大さが最も不思議に見えるのは苦悩の状況においてである。というのは、王子の気に入りの地位や称号でお世辞を言おうとしている宮廷人の中にいる王子や、征服者の意志を実行しようと用意している10万人の部下の先頭にいる征服者は、どんなに野心的で、気まぐれで、残酷であっても、眼まいのするような誇りの中で、彼らの手先以上に高く自分自身を上げることは、想像に難くないし、実際、説明に難くないように思われる。しかし、鎖につながれ、投獄され、いや最も恥ずべき地下牢にいる者が、忍耐強い誇りと頑固な威厳をもって、他の人類以上に自分自身の性質の中にあの壮大な優越性を発見することは、下品な人の眼には、これ以上しあわせなことはないように思われる。いや彼のために丁度今働いている天と神（の保護）を発見することは、偉大さの謎のひとつである。とはいっても、その道の達人によってのみ全く理解されるのだが。」（2巻11章）

公然と自分の身分に誇りをもつ王子や征服者に比較して、とらわれの身である泥棒の内心の誇りの優越性を主張しているが、その道の達人、即ち、同類の泥棒しかこの誇りは理解できないと言っているのである。

(f)主人公ワイルドの日ごろの心情の描写。

「人間の偉大さとしあわせはいつも分けられないのではないという生きた強い実例である私たちの主人公。彼は突然の恐怖、勇気のなさ、妬みにたえずおびやかされている。彼が見る人は誰もが彼ののどを切るためのナイフをもっているし、財布をとるためのはさみをもっていると考えていた。特に彼自身の泥棒仲間に関して、わずか5シリングのために彼を絞首台に連れて行こうとしない者はひとりもないと全く確信していた。このような心労がたえず彼の平安をこわし、彼に向って立てられるどんな計略も失敗させ、裏をかくために、熱心に自分を守っていたので、彼の心身の状態は、光荣ある野心の眼には言うまでもなく、妬みと欲望の対象というよりむしろ嘆かわしく思われるかも知れない。」（3巻13章）

泥棒の心情を描写しているが、作者自身が実際に泥棒であったわけではないし、泥棒にきいたかどうかは分からないので、作者の単なる想像にすぎないだろう。

(g)投獄されているワイルドの心根について。

「私たちがこの物語の中で熱心に描こうと努力して来たある偉大さに関係なく、人間のしあわせを評価した人の言語で私が話すなら、彼は彼自身あまりに高く払えない1シリングも囚人からは決して取らなかった（即ち、奪わなかった）ということはあるようなことである。」（4巻3章）

泥棒といえども、刑務所の内と外とでは立場が違うので、とらわれの身である囚人からは1シリングも取らないぐらいに仁義を守ったというのであろう。それにしても不思議なのは囚人も金をもっていたのだろうか。

(h)偉大さを考慮する場面で。

「私たちの主人公は泥棒たちに上手に言って物を取り上げたり、借金をしている物にいろいろ強要したりする点で、偉大さの最高の証拠を毎日示したが、借金取り立ての方がこのごろひどくなって来た、すなわち、道德の点で墮落して来た、ので、借金をしている者は、下品な連中が言う正直を極度に軽蔑してしゃべった。彼らの最大の性格はすりの性格であったが、もっと真実の言語で言えば、ファイル (pickpocket「すり」の俗語) であったし、唯一の非難は技巧の欠如であった。」(4巻12章)

すり仲間での「道德」とか「正直」は面白い。

(i)上記と同じ場面で。

「私(作者)自身として告白すれば、この絞首刑の死は誰よりも主人公にとって適当であると見なし、アレキサンダー大王が絞首刑になっても、彼の死後の名声に対する私の尊敬を決して減少させないと断言する。もしある主人公が人生において沢山の害悪だけをするとしたら、もし彼が未亡人、孤独、貧乏人、しいたげられたもの(沢山の作家が散文でも韻文でもにがにがしく嘆いて来たように、偉大さ、即ち、泥棒稼業の唯一の報酬)によって十分心からのろわれさえすれば、彼の死がまさかりによるのであろうと、絞首索であろうと、剣であろうと、どんな性質のものであるかはほとんど役に立たないと思う。そのような名前はいつも後世まで確実に生きるだろうし、輝やかしく熱心にむさぼられた名声を楽しむことになるだろう。」(4巻12章)

一介の泥棒にすぎないジョナサン・ワイルドをアレキサンダー大王と同一視しているのが面白いし、作者の大王に対する風刺がある。

(j)最後の章で。

「実際に、偉大さが権力・高慢・尊大、もっとはっきり言えば、人類に損害を与えることにある間、偉大な人間と偉大な悪漢が同意語である間、ワイルドは偉大さの頂上に比類なく長く立つことになるだろう。そしてまた彼の性格の完成として、墓石とか彫像に実際に記録されるべきこと、上記の彼の死と彼の生涯が一致すること、そしてジョナサン・ワイルド大王は彼の強力な計略ののち、非常にわずかの偉大な人間がなしとげること、即ち、首を絞られて死んだということを私たちはここで省略してはいけない。」(4巻15章)

作者はジョナサン・ワイルドを英雄視し、絞首刑にされたのを名誉と見なしているようであるが、たかが泥棒ぐらいを絞首刑にまでしなくてもよかったのにというような、ある意味で、同情を示しているようでもある。

(k)ハートフリーの召使いが彼のかわいい娘を彼のところに連れて来た時、彼女がしゃべる言葉に感動して涙ぐんだトハートフリーは

「優しさと慈しみのこのちょっとした努力を征服する十分な偉大さを持っていない気の弱い愚か者」(3巻1章)

であった。これは「偉大さ」を持たない1例である。

(2)偉大な人間(偉人)(great man, great men)について

(a)ワイルドの幼少時代の気質について

「子供はthの発音が難しいように、子供ができる最後の発音であるように、ワイルドおぼっちゃまも容易に発音できなかったということを除いて、ワイルドの幼少時代には、特に顕著なことは起らなかった。そしてまた、彼の気質の優しさを示す幼い頃の徴候を省略してはいけない。というのは彼は決しておどされて何かに同意することはなかったが、あめだまを見せられて、人にのせられることはあるかも知れなかったからだし、実際に、真実を言えば、彼のほしいもの(わいろ)を見せられるとすぐにのせられてしまった。こういうことがあって、彼は偉人になるために確かに生まれたと言われた。」(1巻3章)

偉人といえば「もの」「わいろ」と計略に関係があるものだろうか。

(b)ワイルドとカウントが対話をしている場面でカウントの言う言葉。

「野心というものは持たないと誰も偉人にはなれないが、野心がうんこの山よりも楽園の中の山を彼が好むようにすぐ指し図するものである。いや、偉大さにとって最もいみ嫌うべき感情である恐怖でさえも、低い階級よりも高い階級において彼の強力な能力を自由に十分にしかもずっと安全に実行できるかを教えてくれるものである。というのはタワーヒルの1世紀よりもタイバーン(ロンドンの死刑執行場)の1年にしばしば群衆がいるということを経験が教えてくれるからである。」(1巻5章)

野心と恐怖は偉人の心の両面を表すものであるかも知れない。言いかえると、人間の偉大さは野心と恐怖にあるのだろう。

(c)ワイルドの友人フィアスが処刑されないように、ワイルドはいろいろ援助を約束したが、結局失敗したことについての描写において。

「この本当に偉大な人は人々のいろいろな感情をもてあそぶ方法を知っていて、人々を敵対させたり、妬みや懸念の中から自分自身の目的を達成したりした。うらぎり、しらばくれ、約束、うそつき、虚偽と下品な人が言うあのすばらしい技術で人々の妬みや懸念をいとも簡単につくり出していたが、偉大な人々は政策、政治、いやむしろ政治的策略(?) (pollitrics)という名前で呼んでいて、その技術こそが人間性の最高の優越性であるので、私たちの偉人はその最も卓越した指導者であった。」(2巻5章)

ここの描写で作者はワイルドを非の打ち所のない偉人、即ち、悪人に描いている。

(d)作者が読者に偉人たちの家庭での様子を知らせたいという場面で。

「まず、偉人は小物との普通の生活では同じもろさや不便を受けやすいということ。次に偉人は自分自身あるいはおべっか使いが反対のことを主張するためにあらゆる努力をするが、実際は他の人間と同じ種類であるということ。次に偉人はその偉大さ、即ち、極悪(下品な連中

が誤ってそう呼ぶ)の量り知れなさの点で主に違うということ。」(3巻9章)

偉人といえども普通の生活をさせれば、普通の小物と変らないが、違う点は量り知れないぐらゐの悪さをするということである。これは偉人のもって生まれた性格から来るものであろう。

(e)ニューゲイト内でのワイルドの振舞いが債務者達(囚人)を怒らせて、彼らが不平不満を言っている時、囚人仲間で権威のある非常に謹厳な男が来て演説を始めるが、その最初のところで。

「子羊を狼の道に置いて、子羊が食われるのを嘆く人の行為ほどまさしく馬鹿げていることはありえない。偉人と社会との関係は狼と羊小屋との関係である。」(4巻3章)

直接、偉人と庶民との比較はしていないが、その関係は狼と子羊との関係であって、偉人は非常にこわい者であると作者は言いたいのである。

(f)小説の結論のパラグラフで。

「実際に、偉人の共通の宿命を考える人は誰でも、世界によって与えられるあの拍手かっさいに十分価するが、それを実際にはほとんど受けないことを認めなければならない。というのは偉大さへの道に伴なう労働、苦勞、心配、不安、危険を考えると、『人は天国へ行くかも知れないが、その苦勞の半分で地獄が買える』と私たちは聖職者とともに言ってよい。真実を言うなら、世界はワイルドのような性格に少くとも名誉を与える次のような理由を持っている。即ち、誰もが完璧に正直になれるのに、1,000人中1人も完全な悪人になれないし、もし人がわが主人公を真似てみたいという虚栄心に鼓舞されても、あまり成果のない努力ののち、自分はジョナサン・ワイルド大王より劣っているとどうしても告白するものである。」(4巻15章)

わが主人公ジョナサン・ワイルドはやはり大王たるにふさわしい性格を十分備えていると作者は言いたいのである。

(3)偉大な(great)について

(a)主人公ワイルドの性格についての描写で。

「私たちの主人公の中には本当に偉大でないものはなかったし、全然恥じ入ることもなく、彼がほんの今ポケットの物をとったと知っている本人と一杯飲むことができたし、相手の持ち物を全部とったときは、これ以上害を与えたいとは決して思わなかった。というのは彼のあのすばらしい異常な程度まで、氣立てのよさを持っていたので、彼自身利益を期待しない男または女にただひとつの害も与えなかった。反対に、一味がしばしば悪魔と悪い契約をしたので、ただで自分の仕事をしたと彼はよく言ったものだ。」(1巻11章)

彼がいかに「偉大」であったかを示す1例である。

(b)ワイルドの幼な友達トマス・ハートフリーの性格について。

「トマス・ハートフリー氏は正直であけっぴろげの性質をもっていた。彼は世の中に虚偽と偽善のようなものがあるということを経験だけで知るような人間だったし、25歳にもなれば、最も年を取って最も油断のならない者のようにだまされにくいものだが、彼はそうではなかった。彼は氣立てがよくて、友好的で、極めて寛大であったので、心の大きな(great)弱点をい

ろいろもっていた。」(2巻1章)

ハートフリーの性格は、一般的に考えると、「お人よし」という言葉で片付けられるようなものであるが、ワイルドのような泥棒仲間とのつき合いにおいては、それが心の弱点になるし、しかもそれが「ひどい」ということになる。

(4)信義(honour)と信義の人(man of honour)について

(a)数人がゲームをしている場面で。

「バググショット君が椅子から立ち上り叫ぶ。『おれは紳士や信義の人の中にいたと思ったんだが、ちくしょう、この中にすりがいる』と。今度はすりと疑われた紳士が立って、『おれのことかい。ちくしょう。お前の眼は何だ。悪漢め。悪党め。』といってあわや二人がなぐり合いになるところを周囲の者が引き止めて仲直りをしたあと、ついにわが主人公であるワイルド氏がおもむろに席を立ち、次のように演説を始める。『いまふたりの紳士が信義に関して言ったひとことひとことを無限の喜びをもって聞いた。いや、おれ以上にその信義の高い上品な意味を誰も理解できないし、その言葉のもつ価値に誰も尊敬をいさぐことはできない。もしわが隠語辞典に信義を表わす名前がないなら、おれたちで作ればよい。信義とは実際紳士の本質そのものであり、この分野であるいは路上で偉かった者でも、この本質をそなえていなければ、恐らく偉くはなれない。しかし、悲しいかな、紳士諸君、このような最高の用法と美德をもつ言葉が非常に不確実でさまざまに応用されるので、このふたりが同じ意味で言っているのではないことが何と遺憾なことか。信義と言えは、気の弱い連中が美德と呼ぶ気立ての良さ、人間性のことを言っているのではないか。それではどうだ。おれたちは偉い人、勇敢な人、上品な人に対して信義を否定しなけりはならないか。町の略奪者、地方の略奪者、王国の征服者に対して。彼らは信義の人ではなかったか。それでも彼らはおれが言ったあのあわれむべき本質を軽蔑する。もう一度言うが、正直という考えを信義の中に入れていいる人がある。それでは、法律で、あるいは裁判所で、所有者が決まっているものをその人に教えないでおく者、所有者からそんな財産を堂々と大胆に奪う者は信義の人ではないと言うだろうか。この仲間の中で、あるいはほかの善良な仲間の中で、おれのこういことが絶対にないように。信義は真理か。いや、信義はおれたちから出て行く嘘の中にあるのではなく、おれたちにやって来るとき、おれたちの信義が傷つけられるのだ。それでは信義は下品な連中が首徳と呼ぶものの中にあるのか。想像するだけでも侮辱であろう。というのは首徳を持たない信義の人を非常に沢山毎日見るからである。それでは信義という言葉は何にあるのか。そりゃ、言葉そのものの中にある。信義の人というのは信義の人と呼ばれる人のことであって、彼がそう呼ばれている間、相変わらずそうであって、それより長くはない。人が行なうどんなことも、人の信義を奪うと考えるな。広く世間を見よ。泥棒は栄えている間、信義の人であり、彼が刑務所にいたり、バーにいたり、ツリーにいたりする時は、もう信義の人ではない。それでこの違いはどうしてか。彼の行為からではない。というのは行為は、あとで有名になるように、栄えている時有名だからであるが、人々(おれが言っているのは彼の仲間とか一味のことだが)人々は彼が栄えている時は信義の

人と呼ぶが、そうでない時は、そう呼ばなくなるからである。それじゃ、もう一度考えることにしよう。バッグショット君は紳士の信義をどのようにして傷つけたか。そりゃ、彼をすりと呼んだし、恐らく厳格な解釈と推論の長く回りくどい方法によって、彼の信義を少し傷つけるように思われるかも知れない。もし非常によい意味で考えれば、である。従って、議論のために、彼の信義を少し非難することになったのを認めた上で、バッグショット君は紳士に満足を与えよ。彼は信義の人だと信じると直接主張することによって、この回りくどい侮辱を二重にも三重にも修復せよ。』(1巻13章)

バッグショット君と紳士の間で、またひと悶着起りそうだったが、周囲の連中がなだめすかして、めでたく終りとなる。泥棒仲間での「信義」と「信義の人」ということであるが、日本のやくざ仲間では、「義理」と「人情」ということになるだろうか。

(5)自然の女神(Nature)について

(a)主人公を弁護する場面で。

「私たちは次のように述べる許しを乞わなければならない。即ち、自然の女神は、登場人物を絶対に完璧に描く作家ほどには、めったに親切ではない。女神はどんな人間も完全に偉く創ったり、あるいは完全に下品に創ったりするのではない。ただし前者においては人間性のきらめきがゆれるし、後者においては下品な連中が悪と呼ぶもののあるきらめきが出て来るし、両方のきらめきを全く消すことは両者にある苦痛と不安を与える。というのは、信心ぶった偽善者の心がもしかして作られなかったならば、どんな心も完全に欠点なくこれまで作られたことはないと私は理解するし、ある育ちのよいおべっか使いが偽善者をほめたたえたとしたら、そうすることが当然だと感謝の念をもって考えたのだと私は理解するからである。」(4巻4章)

人間である作家だったら、登場人物を完璧に、善人だったら善人に、悪人だったら悪人に描くことができるが、自然の女神はそういうことはない。善人といえども悪人の一面をもっているし、悪人といえども善人の一面をもっているそのような人間を創り出す。わが主人公ワイルドは登場人物の一人であるが、このモデルになった人物は実在したのである。作者は主人公を弁護するだけでなく、間接的に、実在したワイルドを弁護しているのである。

(6)ニューゲイト(監獄)について

(a)ニューゲイト内の状況について。

「美徳、善などに関して、泥棒は上機嫌とあざ笑いの対象であつたし、ニューゲイトはすべて泥棒の完全な収集であつたし、誰もが隣人のポケットをねらっていたし、隣人が自分のポケットをねらっていると誰もが気づいていた。したがって、これはほとんど信じられないことだが、大きな悪事(いたずら)がニューゲイトの壁の外と同様に内でも毎日行われていたのである。」(4巻12章)

(1)の(g)でもちょっと述べたように、当時の監獄内では私物の所有が許されたのだろうか。トランプか何かのゲームみたいだったのではないか。悪事というよりいたずらだったのだろうか。

(7)格言的表現について

(a)ワイルドがボートに1人乗せられて、海をさまよっている最中、女性を非難し、愛という激情を非難して、いつのまにか自分自身が下品な不平に満ちたことをつぶやいているとわかって、しばらく黙っていてから、突然一人言を言うその最初の場面で。

「人は1度だけ死ぬことができる⁽¹⁾。それは何を意味するか。誰もが死ななければならないし、それが終る時終る。」(2巻11章)

シェイクスピアの『ジュリアス・シーザー』の中に「臆病者は死ぬ前に何度も死ぬが、勇敢な者は1度以外死を決して味わわない」という現在諺になっている文があるが、フィールディングは人の死をこのように区別して言っているのではないし、精神的に死ぬとか肉体的に死ぬとかいうように複雑に考えていないようである。

(b)上記と同じ場面で。

「人が死ぬ時、人の終りがある。」(2巻11章)

文字通り理解すればよいと思う。

(c)ワイルドがニューゲイト内で敵対するファイアブラッドの告白(ワイルドを呪って、彼が地獄に落ちるように誓ったことの告白)を受けて、ワイルドが言った言葉。

「罪を赦すことほど尊いことはない。」(3巻14章)

「赦して忘れよ」という諺に通じる一文である。

(d)ワイルドとニューゲイトの教戒師との対話の中で、死や不滅(永遠の生命)などについて話す場面で、教戒師が言う。

「絶望は罪深い。」(4巻13章)

この文と全く同じ文を『ジョウゼフ・アンドルーズ』の中で、アダムズも言っている。

(e)上記と同じ場面でワイルドが言う。

「死とは何か。死とはプラトンのような人々、シーザーのような人々と一緒にいることであり、昔の偉大な英雄たち全部と一緒にいることである。」(4巻13章)

偉大さの程度の差はあっても、死という点で共通しているので、死はこわくないと言っている。これと似た英語の諺に Death is the great leveller. (死は人間すべてを平等にする)がある。

(f)上記と同じ場面で、教戒師の話の中に出てくる。

「罪(sin)ほど罪深いものはないし、殺人はすべての罪の中で一番大きい罪である。」(4巻13章)

後者の「殺人は…」は出エジプト記、第20章第13節の「汝殺すなかれ」を意識しているのは当然であるが、ワイルドを絞首刑にするのはどのように解釈すればよいか。

(g)ワイルドが教戒師の説教を聞いて、「よしわかった。一杯のみましょう。」という場面で、教戒師が言う。

「酒を飲んで出る元気ほど人をだましやすいものはない。」(4巻13章)

——注(1)下線部は筆者。以下すべて同じ。——

普通だったら、「よし一杯やろう」というところだが、教戒師は今度は酒について説教を始める。

(8)ワイルドの格言について

4巻15章に、ワイルドが偉大さを達成するある方法として、いくつかの格言をつくり、偉大さを追求する際に、彼が絶えず守った格言があるので、以下に列挙する。

- (a)人が目的を果たす場合、必要以上に決して害悪を与えないこと。
- (b)人と愛情を区別しないこと。しかしすべての人をその利益に合うように喜んで犠牲にすること。
- (c)あることを実行しようとしている人に必要以上に決して教えないこと。
- (d)おれをだましたやつ、またはおれにだまされたと知っているやつを信頼しないこと。
- (e)どんな敵も赦さないこと。しかしいつも気をつけていて、復讐はゆっくりすること。
- (f)貧乏と苦悩を避けること。しかし相手をできるだけ権力と金に結びつけること。
- (g)人の容貌と振舞いの変わらぬ真面目さを支持すること。そしてあらゆる機会に英知のあるふりをする。
- (h)相手の仲間の中で、お互いに永遠の妬みを助長すること。
- (i)相手の長所にあうようなほうびは決して与えないこと。しかしそのほうびは実際以上であるといつもほのめかすこと。
- (j)人間はすべてならず者か愚か者であり、はるかに多くの者がこの両者からなっているといふこと。
- (k)金(かね)のようによい名前は、所有者に何らかの利益をもたらすために、手ばなさなければならぬし、少くとも、大いに危険な目に会わなければならないということ。
- (l)美德は、宝石のように、模造されやすいといふこと。模造品は両方の場合に身をつけている人を等しく飾るということ。本物の宝石と模造品を区別するのに十分な知識と眼識をもっている人はほとんどいないということ。
- (m)多くの人が極悪まで深く落ちないで墮落させられるということ。ゲームの場合のように、誰もゲームを全部しないうちに負けになるかも知れないということ。
- (n)店の経営者が品物でもうけるために陳列するように、人は自分自身の美德を主張すること。
- (o)心は憎しみの丁度よい源であり、愛情と友情の顔であるということ。

4. 主人公の性格と行為の解釈

フィールディングは主人公のワイルドについてどのように考えているか。要約すると以下の通りである。

- (1)ワイルドは偉人、即ち、悪人であるが、完全な悪人ではない。
- (2)歴史的に大王とか帝王とか偉人とか呼ばれる人物の方がワイルドよりはるかに悪人である。

(3)小説や伝記作家や歴史家がある人物を描写する場合に、もし真実を伝えていないならば、その人物が実際は善人であっても、逆に、悪人であっても、読者や庶民は誤解をしたままである。

(4)ワイルドは罪人（^{つみびと}sinner宗教上・道徳上の罪人）であって、犯罪人（criminal法律上の犯罪人）ではない。

(5)人間が生きて行く上で、絶望を宗教上の罪、即ち、神の掟にそむくことと考えている。

結論として、ワイルドが犯した罪と大王が犯した罪を比較すると、前者の方がはるかに小さい。それなのに、世間は、庶民は、それを認めようとしない。そこにフィールディングの義憤があり、その屈折したものが風刺となり、皮肉となっている。作者はワイルドを擁護し、彼の罪を救おうとしている。その具体的表現が上記の(4)である。大王・帝王・偉人と言われる人の方がはるかに犯罪人である。法律上の犯罪者である。人物やものごとを見る場合に、全く逆の視点に立つと、従来偉人と考えられた人物も悪人になるということを主張する物語がこの『ジョナサン・ワイルド大王』である。

（平成3年9月17日受理）